

アクティブラーニング

動き出す学校と先生たちの実践レポート

# AL型授業への挑戦

昨年からアクティブラーニング型授業(以下「AL型授業」)の気運は急激に高まり始めましたが、先駆けて取り組みを始めていた高校もあります。この連載の監修者である、産業能率大学の小林昭文先生がかねてより紹介したいと語られていた鳥取城北高校もそのひとつです。若手の先生個人の取り組みからスタートし、現在では学校全体の取り組みへと進化している、鳥取城北高校の事例をご紹介します。

企画協力/小林昭文(産業能率大学 教授) 取材・文/長島佳子 撮影/佐野明美



第7回

## 鳥取城北高校(鳥取・私立)

School Data

1963年創立/全日制普通科、商業科/生徒数965人(男子545人、女子420人)/進路状況(2015年度実績)大学93人、短大15人、専門学校67人、就職51人、その他16人

**授業は知識の定着の場でなく  
学ぶ意欲をわかせる場**

「生徒が授業外で、  
自主的に学ぶようになったこと」が  
AL型授業の最大の効果

AL型授業を中心に進めている先生たちに、今では他校から講師の依頼もあるという鳥取城北高校。取り組みのきっかけは、田中将省先生(以下、将省先生)個人の課題感から始まった。

「担当する物理の授業の進度が遅く、問題演習や実験に十分な時間が取れていませんでした。生徒たちは授業を真剣に聴いているのに成績が伸びず、自分の力不足を悩んでいました」(将省先生)

2012年、鳥取大学が間接支援型高大接続プロジェクトの研修参加者を募集していた。当時、越ヶ谷高校の教員だった小林昭文先生の授業視察だ。小誌の記事で小林先生のAL型授業の記事を見ていた将省先生は「これだ!」とすぐに研修に申し込んだ。

だそう。

越ヶ谷高校の生徒たちの学び合う授業に衝撃を受けた将省先生は、学校に戻るとすぐに小林先生から学んだ方法を自分の授業で実践した。当初は思うようには授業が進まず、試行錯誤していた翌2013年、鳥取大学で小林先生を招いてのフォーラムが行われることになった。

「AL型授業をひとりで行うことに限界も感じていたため、職員会でフォーラムへの参加を呼びかけるところ、9名もの先生が手を挙げてくれました」(将省先生)



同校でのAL型授業取り組みのきっかけをつくれた田中将省先生。

「AL推進」の先生方



(英語科) 山根正樹先生 (教頭・国語科) 矢部公章先生 (社会科) 矢崎正人先生  
(AL推進主任・数学科) (校長) 田中光一先生 (理科) 石浦外喜義先生 田中将省先生

同行した他の先生たちも、教科は違っても将省先生と同様の課題を抱えていたのだ。

「その日が、自分の授業観が180度変わった運命の日になりました」(田中光一先生・以下、光一先生)

授業観を変えたのは、「AL型授業で知識は定着しているのか?」に対する小林先生の答えだった。

「授業は知識の定着の場ではなく、『飢餓状態』にする場だと。生徒がもっと知りたい、もっと学びたいと感じることが授業の目的だと知らされたのです」(光一先生)

将省先生同様、すぐに自分の数学の授業で小林先生の真似をしてみると、小林先生が言っていたとおり「寝ていた生徒が本当に起きた」そう。

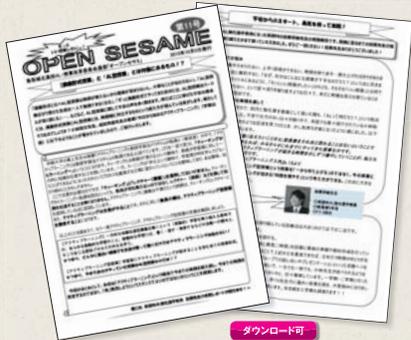
← 次ページにつづく

## 鳥取城北高校の アクティブラーニング型授業への 取り組みの歩み

- 2012年11月 鳥取大学間接支援型高大接続プロジェクトでの越谷高校(埼玉)への視察に、田中将省先生が参加
- 2013年3月 鳥取大学高大連携フォーラムでの小林昭文先生の講演に9名の教員が参加
- 同年4月 「AL・授業改革委員会」発足
- 同年6月 小林昭文先生を招聘した全教員対象の校内AL研修会を実施



- 同年8月 校内AL通信『OPEN SESAME』発刊



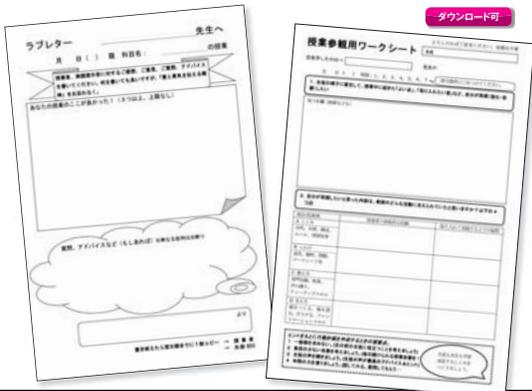
ダウンロード可

- 同年9月 小林昭文先生を招聘したアクションラーニング研修会宿実施



- 2014年4月 AL・授業改革委員会主催「校内AL研修会」開始(年1回)
- 2015年4月 EST&強化選手教員の設置
- 2016年4月 校内分掌として「AL推進」発足

\*「Extensively Skilled Teacher」の略。鳥取県の「エキスパート教員」に準ずる同校独自の位置付け。



ダウンロード可



「授業は自ら学ぶ楽しさに気付く場所と知った」と語る田中光一先生。

**若手からのボトムアップを  
管理職がフォローし急進展**

効果を実感し始めた先生たちは、

「AL・授業改革委員会(以下AL委員会。現在のAL推進)」を発足し、体系的にAL型授業を深化し、広めるしくみをつくった(取り組みの流れは左図参照)。若手が発信し管理職がフォローするという、自由でボトムアップの校風が功を奏し、急速に進展していった。

授業のブラッシュアップのために、AL委員会は常に最新の情報を外部から収集し、個々の教員たちは自分の授業

を工夫し始めた。また、全校に広める

ために、それらの情報を共有する校内通信『OPEN SESAME』を発

刊したり、教員同士の「相互授業参観」も積極的に推奨している。

「参観の際は見学者の気づきのための『授業参観用ワークシート』と、授業者へ感想を述べる『ラブレター』を記入してもらい、双方の学びの機会としています(左下)。(矢部教頭)

**学ぶ楽しさを知った生徒が  
自ら学習会を開いている**

AL型授業を導入した後も、先生たちは様々な課題にぶつかり、一つひとつ解決している。

「習熟度の幅に対し、どこに合わせるか」という課題感をずともっています

た。AL型授業は幅があつてこそ教え

合いが成立し、生徒が多様性を認め合うと気付きました(山根先生)

「グループワークが苦手な生徒がいる場合は、態度目標を提示して、チームへの貢献度を振り返りシートに記入させることにしました。授業の目標がわかると、生徒の態度も変わっていきます(光一先生)

「暗記科目の社会科で、覚えているはずの知識を実生活につなげられない生徒が多くいました。しかし、授業中に会話OKのAL型授業なら、みんなの意見を聞いて知識がつながるようになります。以前は『これは自分の知っているあれのことじゃないかな?』と思つても、授業中に声を出すと怒られるので言えなかったのです(矢崎先生)

取り組みを続けた結果、生徒たちに顕著な変化が表れてきた。「授業が楽しい」というだけでなく、放課後に主体的に学習会を開く生徒が出てきた。全国模試の結果にも良い影響が出ている。また、オープンスクールなどで中学生対象にAL型授業を実施したところ、「人に教えるのもっと理解できた」、「意見を言える自信がついた」という感想が出て、AL型授業を理由に専願者が急増しているそう。AL型授業による同校の進化は今後も続きそう。

教員7年目  
田栗早敏先生



コミュニケーション英語  
(3学年)

大学院時代に非常勤講師を経て、2010年より鳥取城北高校着任。2015年よりALの強化選手教員。教員としてのモットーは「Be kind, but don't be too kind」



音楽あり、拍手あり。  
生徒を飽きさせず、声を  
発しやすい環境を作っています

間違った発言もOKの授業で  
英語が苦手でも好きになる

授業開始とともに『ゴーストバスターズ』の軽快な音楽が教室に響き、和やかな雰囲気が始まった田栗先生の授業。オールイングリッシュで、先生が事前作成したスライドとワークシートで進行する。授業の目標は「Keep Talking!」「Don't Be Quiet!」。つまり、ずっとしゃべってないといけない授業だ。

全編ペアワークで進行し、スクリーンに映し出されたお題やワークシートの設問に対し、ペアワークの後、先生がランダムで指名して発表へと続いていく。長くてもひとつのワークは1分程度。

テンポを重要視しているため、ワークシートの英文にはふりがながふつてある。単語が読めずに活動が止まるストレスを与えるより、ふりがなを読んでも言葉が発することが大切だと田栗先生は考えている。

「英語で話すことが楽しくなると、『苦手だけど好き』という生徒が声を出して授業を引っ張っていつてくれるようになりました」

進行役の田栗先生はずっと笑顔ながらも、汗をびっしょりかいているエキ

サイテイングな授業だった。

ALがグループワーク  
生徒主導の授業であればいい

田栗先生がAL型授業にトライし始めたのは昨年からだ。学校の方針として取り入れるべきと言われたときは、今までの授業を否定されたようで不安だったという。

「でもALは形式のことではなく、生徒が自ら考えて活動すること、純粹に授業を良くすることだと知りました。それなら今までの授業にもALの要素があると思ひ、チャレンジする意欲がわきました」

当初はモデルがなく、どこから手を

つけばいいかわからなかったため、外部の研修に積極的に参加して勉強しているそうだ。

「先輩の先生方も常に研修を受けて励んでいる姿勢を見て、若い自分もつとやらなければと思いました」

これからは、英文の物語を読んで生徒同士が語り合ったり、ラップの歌作りや、映画のアテレコなど、授業でやってみたいことがたくさんあるという。

「大学時代や研修などで素晴らしい先生方にたくさんさんの良い教えをいただいたので、学んだことをすべて授業に活かしていきたいです」



設問はすべてスライドで進行。スライドにタイマーも現れてテンポよく進んでいく。

ペアワークも恥ずかしがらずに、隣の席の生徒と大きな声で会話する生徒たち。



間違えたり、わからないことも言葉にだすことで、仲間がヒントをくれるので、自信をもって挙手することができる。



上手な発音でなくても声を出すことが大事だとわかっている生徒たちは、自分が知っている単語で何とか説明を試みる。

